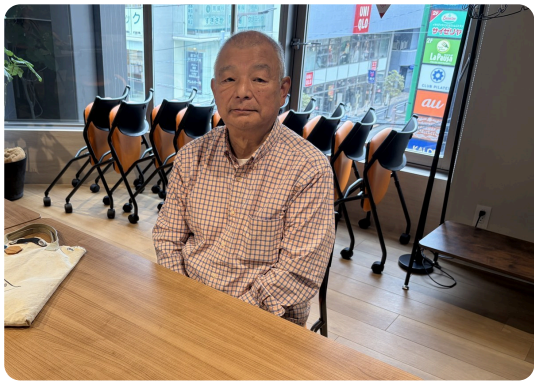
この人に聴く ～仙川の昔と今、そして明日～ ＜第４回＞

郵便局とともに、まちに生きて

小幡 邦仁さん（おばた・くによし／保護司・調布仙川郵便局 元局長）

仙川の記憶をたどる連載「この人に聴く」。第4回は、調布仙川郵便局の元局長・小幡邦仁さん。今年、古希（70歳）を迎えた。4代前は天保、曽祖父は文久、祖父は明治の生まれ――この地に古くから続く家に生まれ、父が興した特定郵便局を、国会議事堂内の郵便局での勤務を経て受け継いだ。いまは保護司として十八年、人の立ち直りを地域で支えている。大変な読書家でもある小幡さんに、郵便物とまち、人の記憶を聴いた。取材は2026年10月20日、Share Nest 仙川で行った。

「私の名前、なんと読むか分かりますよね」。小幡さんはそう言って、少し笑った。**邦仁（くによし）**――昭和の一桁生まれの両親が、「仁」の字を入れたいと願ってつけた名だ。じつは戸籍上の「邦」は、左上の部分が出ない特別な字体で、役所やパソコンでは出てこない。「免許の書き換えでも、ここだけは手書きしてくださいと言われるんです」。名前ひとつにも、時代と土地の記憶が宿っている。



Share Nest 仙川の会議室で。窓の向こうには、調布仙川郵便局に近い仙川駅南交差点がある。

代々の、郵便局



いまの調布仙川郵便局。赤いポストが、まちの入り口に立つ。

小幡さんの父がこの地で最初に特定郵便局を開いたのは、昭和39（1964）年4月だった。お向かいのPOSTO（自由な場の喫茶店）があるあたりに、木造の局舎があった。ある年の台風で屋根が吹き飛ばされ、昭和46（1971）年ごろ――ちょうどオイルショックの頃に、いまの場所へ建て替えて移したという。

調布にはもともと、明治から続く**調布郵便局**があった。明治5（1872）年の「布田五宿郵便取扱所」に始まり、昭和41（1966）年に国領へ移った、集配を担う親局である。神代や国領駅前、上石原といった局も早くからあった。そこへ戦後、暮らしに身近な**特定郵便局**を各地に増やす国の施策が重なる。**田中角栄氏が郵政大臣を務めた昭和32（1957）年ごろ**から、地域の小さな局が急に増えていった。調布仙川郵便局も、そうした流れのなかで開かれた一つだった。

局を開くには、収集の車が通る道が要る。「**川原武次さんや、徳重さんに協力していただいて、土地を出してもらって、道を通したんです**」。いま当たり前に使われている駅前の道の一本は、そうして地主の人々の

協力で生まれたものだった。いまフォレストスクエア仙川が建つあたりも、かつては両側が竹藪で、車も通れない幅二メートルほどの細い道だったという。

小幡さんは、昭和61（1986）年3月に父の跡を継ぎ、長く局長を務めた後、平成19（2007）年に諏訪部彰三さんとバトンタッチした。この年民営化により、日本郵便株式会社の郵便局に移管されている。現在の松下勝局長は、小幡さんが局長だった頃の、平成4（1992）年に採用された職員で、数えて四代目にあたるという。

国会議事堂内の、郵便局

家業を継ぐ前、小幡さんは大学を出て、ちょっと変わった郵便局に勤めていた。**国会議事堂内の郵便局**である。六年間、ここで働いた。扱う郵便物には、議員事務所からの**内容証明**もある。「同じものを三部つくるんです。これくらい分厚いのを、どんと出されてね」と、指で厚みを示す。議員から外国へ送る郵便の品名書きで、思わぬ叱責を受けたこともある。

国会の地下は、衆議院から参議院、両議員会館のほうまで、ぜんぶ通路でつながっている。その地下を使えば、どこへでも行けた。表を通れば、秋には銀杏が落ちて匂い、朝早くには近くの料亭の人が拾いに来る。翌日の議事日程を各議員に届ける仕事は、日程が決まるのが遅れると「朝六時まで待って、中央郵便局の集荷便に乗せたこともありました」。華やかに見える場所の裏で、郵便は時間と格闘していた。

天保からの家、京王線の記憶

小幡家は、この土地のとても古い家だ。父が亡くなったとき、金庫から古い戸籍が出てきた。さかのぼると、**4代前は天保10（1839）年生まれ**、曽祖父は文久3（1863）年の生まれ。祖父は明治31（1898）年の生まれだという。かつて多摩の一帯は神奈川県北多摩郡に属し、明治のなかばに東京府へと移った。「うちも、もとは神奈川県だったんです」。

祖父から聞いた話がある。大正2（1913）年に京王線が開通したころは、地上を通っていて、その後に線路は掘割になるが、「掘った土を、つつじヶ丘の土手に回した」という。小幡さんが幼いころの仙川駅は、上りと下りが一つの島式ホームで、端に木造のトイレがあった。「京王線は、よくストライキがあってね」。小学校（滝坂小学校）、中学校（四中）、そして神代高校へ——坂の上と下を行き来する、通学の記憶が残る。

神代高校と、仙川の青春



昭和50（1975）年ごろの仙川。現在のクイーンズ伊勢丹が建つ前の光景（写真提供：小幡さん）。

東京都立神代高等学校に入ったのは昭和47（1972）年、卒業は昭和50（1975）年。学園紛争が終わった直後で、入ってみれば私服の自由な校風だった。昭和15（1940）年の創立で、石原慎太郎原作・夏木陽介主演の青春ドラマ「**青春とはなんだ**」の舞台にもなった学校である。放課後のたまり場は、サトウデンキの隣の二階にあった小さな喫茶店。「昼休みに抜け出して、ナポリタンを食べたりね」。

仕事を退いてから、小幡さんは母校の同窓会「**銀杏（ぎんなん）**」の会報づくりに加わった。また、「調布今昔」を描いてきた中川平一さんの絵を

あしらったカレンダーを、毎年手に入れ続け、「もう十六冊目になりました」。まちと学校の記憶を、こつこつと形に残している。

保護司として、人を支える

小幡さんには、もう一つの顔がある。**保護司**だ。先輩の後を継ぎ、仕事を退いたのを機に引き受けて、来年で十八年目になる。「**保護司とは、法務大臣から委嘱を受けて、犯罪や非行をした人の社会復帰と更生を、地域で支える民間のボランティアです**」。特別職の国家公務員にあたる。

定年のきまりはおおむね七十五歳ほどだが、担い手は少なく、なかなか辞めさせてもらえないという。それでも、罪を償った人が社会へ戻れているか、静かに見守り続ける。人と人の縁を、切らさずにつなぐ仕事である。

大変な、読書家

小幡さんを語るうえで欠かせないのが、本だ。『文芸春秋』は二十年あまり購読し、『世界』『ナショナルジオグラフィック日本版』は創刊号から、通販で取り寄せる『江戸学』はもう十年。岩波の『図書』をはじめ、各社のPR誌にも目を通す。読み終えた雑誌は、種類ごとに整理して、自宅の地下に**段ボール百箱**。自室には、幅も高さも二メートルを超える作り付けの本棚が、目一杯の文庫本と雑誌で埋まっている。

仙川の、これから

いまの仙川を、どう見ているか。真っ先に出たのは「**遊び場がない**」ということだった。子どものころは、原っぱで野球をし、いまの安藤ストリートのあたりや、仙川町の高圧線の下でもサッカーをした。「それが、なくなってね」。小さな公園はあっても、球技はできない。かつては小幡家も農地を持っていた。生産緑地の制度が変わり、農地を維持し続ける難しさも、身をもって知っている。

商店街とのかかわりも長い。協同組合の理事を務め、「おらほ祭り」のときは会計を担ってきた。サンバでにぎわった時代から、祭りの裏方を見てきた一人だ。古いものを受け継ぎ、まちの行事を次の世代へつないでいく——その静かな営みが、小幡さんの生き方にはよく似合う。

小幡 邦仁（おばた・くによし）さん

昭和31（1956）年9月に、仙川の農家に生まれる。神代高校、大学を経て国会議事堂内の郵便局に6年勤め、父の跡を継いで調布仙川郵便局の局長を長く務めた。退職後は保護司として約18年。仙川商店街協同組合の理事、神代高校同窓会「銀杏」の会報づくりにも携わる。無類の読書家。

監修　せんがわまちニティ情報センター／青野 友太郎
取材・編集　株式会社SHARE NEST／代表取締役　大柳 勝、スタッフ　伊集 琉晟
取材日　2026年10月20日（Share Nest 仙川）
制作協力　生成AI（Claude）

※制作方法：インタビュー音源のAIによる文字起こしと、生成AIによる構成案をもとに、編集部（株式会社SHARE NEST）が編集を行いました。掲載にあたっては、せんがわまちニティ情報センターの監修と、ご本人の確認をいただいております。